

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 20 年度派遣報告書

—ケニア・ナイロビ大学、スワヒリ語とマサイ語、H20. 11. 20 - H21. 4. 20—

平成 20 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 2 回生
曾根 咲子

自身の研究テーマについて

研究テーマは、東アフリカ牧畜地域で生業が多角化する過程を解明するとともに、それにともなって牧畜という生業を基礎とした従来の社会関係がどのように変化しているのかを社会生態学的な視点から明らかにすることである。研究対象地域は、ケニア南部に位置するマガディ湖周辺にある牧畜民マサイの集落である。当地域はケニア南部からタンザニア中北部に広がるマサイランドの中核部で、リフトヴァレー東部地溝帯の底部という地理的条件により乾燥の度合いがたつよく、18 世紀から 19 世紀には牧畜生業への特化と牧畜文化の純化が進んだ地域の一つであった。しかし、植民地時代以降には、生態環境的、政治経済的、人口統計的な種々の要因によって、伝統的な牧畜生業は大きく変容している。近年では 80 年代の旱魃による被害を受けて、政府や国際機関を中心として開発援助計画が実施され、賃金労働や農耕、養蜂や工芸品の製作などのさまざまな手段によって牧畜生計を補うことが奨励されており、生業の多角化にともなって国家規模の市場経済システムへの統合が進んでいる。

外部社会との繋がりを強めながら新たな生計戦略を図るマサイの人々が、家畜の贈与・交換や、年齢体系における伝統的な務めをいかに果たしながら社会関係を結び、今なお維持される牧畜的価値を達成しようとしているのかについて、牧畜地域内外の生業間における協力関係に着目して現地調査を進めることが今後の目標である。



〈↑アングリカンチャーチ語学学校〉



〈↑さまざまな国から集まった生徒と〉

研修言語の概要



マサイ語はナイロート語族に属するマー系言語の一つで、サンプル語やチャムス語など他のマー系言語と多くの共通点を有している。一方、独自の発音や単語を持ち、マサイ内部でも地域によって相違がある。ケニア南部からタンザニア北部に暮らす推定100万人近いマサイの人々が話者である。スワヒリ語はケニアの公用語であり、東アフリカの他の地域でもリンガフランガとして、多言語話者が混住する都市を中心に広く用いられている。

〈←スワヒリ語クラスの先生とクラスメートと〉

語学研修の内容について

私の調査対象である、地域を跨いだ複合生業を実践するマサイの人々は、母語であるマサイ語と、公用語であるスワヒリ語と英語を用いて社会経済関係を築いている。当研修では、マサイ語とスワヒリ語の授業を2カ月ずつ、ナイロビのアングリカンチャーチ語学学校で受けた。この学校にはケニアをはじめ、アフリカやヨーロッパ、中東など他地域から生徒が集まり、英語とスワヒリ語を筆頭に、ケニアのさまざまな民族語とアラビア語やフランス語などの外国語を学んでいる。マサイ語とスワヒリ語を選択した私でも、休み時間に英語を介してイタリア語や日本語、トルコ語などの自国語を教え合うという機会を得た。

マサイ語の授業では、研究対象地域であるマガディ地方出身の先生からマンツーマンで、「文法」「作文」「物語・歌」「会話」「書き取り」の5科を総合的に学んだ。先生はマサイ語で初めてポップミュージックを作曲しカセットを販売した歌手で、言葉のリズムの会得を重視しており、先生の発音に続けて何度も発音を練習させられた。「エーエ」という相槌ひとつでさえ、話し手への尊敬の念が含まれているかどうかを示唆するため、何度も復習した。スワヒリ語の授業も、前半で文法事項を学び、後半はイタリアとルワンダ出身の2人のクラスメートとの会話練習が重視され、各単語の発音はもちろん、文章全体のリズムやイントネーションを傍で観察している先生から何度も修正されて習得した。



〈↑マサイ語の授業風景〉

研修期間中に印象に残った体験や経験

マサイ語の先生は、1990年代初めにマサイ語で初めてポップミュージックを作曲しカセットを販売した歌手で、いつも持ち歩いているスーツケースは行商のためのさまざまな歌手のカセットとビデオCDでいっぱいである。よく遅刻する先生と喧嘩をしたり、散歩しながら会話したりするうちに、「自分の歌を楽しんでくれるマサイの人々のために、映像のついたビデオCDを作りたい」という長年の夢を知った。私はビデオカメラとデジタルカムを持ってビデオCDの素材を集めるため、先生のお気に入りのマサイランドの各所を訪れ、先生が歌う場面を撮影した。同時に、大農場で小麦を育てるマサイの村や教会、ヤギを屠って祝ってくれる親戚の家など、先生の馴染みの場所でマサイの今の暮らしを語ってく



れるという課外授業にもなった。「何とかしてお礼をしたい」という先生の気持は旅行後も随所で感じ、私の帰国日に空港で私を待っていた先生の姿は印象的であった。

〈←先生のビデオ CD のカバーデザイン〉

目標の達成度や反省点について

マサイ語もスワヒリ語も、当初の目標であった「基本的な文法と語彙、日常会話の慣用的表現の習得」「正確な発音での発話と聞き取り」「基本的な文章の構成力を養う」という各項目



〈↑授業後が本当の語学鍛錬の場〉

目はある程度達成できたと思っていた。しかし帰国直前になっても、ケニアの友人と日常を過ごしているときに「そんなよく使う単語まだ知らないの!」「そんな堅い表現は笑われるよ!」と言われることも多々あり、今後も日常生活を共にする中で「あれはなんて言うの?」「この表現おかしくない?」と繰り返し聞きながら語彙と表現を増やしていくことが必要だと痛感した。日本にいる間は、今回の研修で集めてきた物語の本や小学校の教材、辞書などを読んで、次回の渡航までに少しでも語彙と表現を増やし、「そんな言葉よく知っているね!」と、ケニアで待っている友人を驚かせてみたい。